

田中秀弘は放課後の校内散策が趣味であることを誰にも言っていない。誰かに言う必要のないことだと思っているから言っていないわけではない。そんなことが趣味の人間は変人だと評されてしまうことを予感しているから、言っていないだけだ。

それはさりとて、彼は自身の異端さをどこかで理解してしまっていることの証左だ。さりとて今日も、秀弘は図書室での勉強もそこそこ、校内散策を始める。

まず、自身がいる第三校舎の一階隅の図書室から、その棟の四階に向かった。校内散策は最終的に本校舎に戻ってくることだけは決めているが、そこに行くまでの経路はその日の気分や天気や出来事に左右される。

イヤホンを着け、加古隆の音楽を聴き始める。どうやら今日の彼は静かに歩きたい気分であるようだった。

誰にもすれ違うことなくうへうへへと上る。三階から四階へと続く踊り場の窓から夕陽が見え、彼は必然に立ち止まった。夕陽の色は緋色だった。つい一時間ほど前までの降雨のおかげかなと彼は思い当たる。やがてポケットから取り出されたのは最新鋭の機器ではなく、「写ルンです」だった。際限の無さからくる必要以上の消費活動を彼は嫌っていた。

構図を考えに考え、一枚だけ撮り、四階へと足を進ませた。

「……おお」

緋色の廊下を見たその瞬間に、感嘆は意図せずしてこぼれた。格子などの影が濃く長く引き伸ばされており、緋色の廊下だけでなくその様も感嘆の理由だった。

秀弘はイヤホンを外した。かわりに第二校舎からのトランペットの演奏がかすかに耳朶を打った。窓辺に寄り、その戸を開けるとよりはっきりと未熟だが力強い演奏が聞こえた。彼の父母は演奏者で、彼の耳は肥えていた。

雨上がりの土のにおいが四階の高さまで漂ってきた。顔にわずかな嫌悪が現れる。窓を閉めようとしたが、彼の聴力は遠くの方からある音を拾い、その手を止めさせた。

「蝉のなきごえ……」

放課後。人気のない廊下。緋色の夕景。力強い演奏。土の香り。蝉の鳴き声。

実にノスタルジックだった。良い思い出になるような予感が働いた。

香り単体であればただただ嫌悪の対象でしかなかったが、それらが組み合わせると途端に味わうべき対象へと、彼の中では変容した。

秀弘は手に持っていたイヤホンを胸ポケットに入れ、それらに身を任せた。次第に風が吹いてきて、髪がゆれた。ひたすらに心身ともに心地よかった。

「ひでひろ」

不意に名前を呼ばれた彼は振り返る。

内的にも外的にも凜々しい幼馴染の異性だった。彼等は恋仲でこそなかったが、時たま古本の街へふたりきりで出かけることがあった。うらやましい限りである。